



| ヤングケアラー支援担当者研修会と共同開催/

2025

令和7年度訪問型家庭教育支援事業

11/5

第2回専門講座

日時 令和7年11月5日（水）
13:30～16:00

実践
発表 「事例を通して、問題を『見極める
目と対応方法』を考える」

場所 上富田文化会館
2F 小ホール

講師 和歌山県教育委員会 委員
湯浅町家庭教育支援チーム「とらいあんぐる」
元リーダー

参加者 37名

上田 さとみ 氏



実践発表

「事例を通して、問題を『見極める目と対応方法』を考える」

今回で2回目となるヤングケアラーについての研修会を開催いたしました。1回目はヤングケアラーについて理解を深めることを中心としておりましたが、今回は上田さとみ先生の実践発表の後、事例検討を中心に、より具体的な支援のあり方について考える内容となりました。

01 ヤングケアラーとは

ヤングケアラーとは、本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを日常的に行っている子どもや若者のこと。幼い兄弟の世話をしたり、家族に代わって洗濯・掃除・料理などの家事をしたり、病気や障害のある家族の介護をしたり、家計を支えるためにアルバイトをしているケースもあります。

例えば、精神疾患を持つ親の子どもが学校に行く気力を失うことがあります。理由は、学校に行っている間にお母さんに何かあったら心配だから。こうした状況は、見ようとしなければなかなか見えません。家族のケアによって、睡眠時間が短くなる、宿題や勉強する時間がなくなる、自分の時間がとれない、友達と遊ぶ時間がなくなるなどの何らかの制約が生じ、その結果、不登校になっている場合もあります。

02 ヤングケアラーの現状

現状のデータでは、小学6年生で約6.5%（15人に1人）、中学2年生で約5.7%（17人に1人）、高校2年生で約4.1%（24人に1人）、大学3年生で約6.2%（16人に1人）がヤングケアラーに該当し、多くの子どもは次のような思いを抱えています。

このうちの半数以上が「だれにも相談したことがない」というデータもあります。

- 誰かに相談するほどの悩みではない
- 相談しても状況は変わらないと思う
- 誰に相談すればよいかわからない
- 家族に偏見を持たれたくない
- 家族のことなので話しにくい、知られたくない

こうした思いから、大人に相談しても仕方ないとあきらめてしまうことがあります。これはとても悲しいことであり、このことを私たちは忘れてはいけません。



03 事例検討①

5つの事例をもとにグループで検討を行いました。ジェノグラムを見ながら問題点を把握し、どのような支援ができるか、解決策について話し合いました。

上田先生からは「家族に『こういう支援ならできるけどどう？』という形でアプローチすることが大切です」とのアドバイスがありました。家事のサポートなど物理的な支援は続けるのが難しい場合もあります。だからこそ、家族や子どもの立場に立って「大変な思いをしている」ということを理解することが重要です。当事者に「がんばつたらいいのに」と言ってもできないことがあります。問題を一面的にとらえるのではなく、家族の状況や思いをしっかりと把握することが求められます。



事例検討②

一つの事例についてグループで協議しました。まず問題点を出し合って課題を明確にし、今後の支援の方向性を共有し、具体的な解決策を考えるという流れ。子どもの学校での出席状況や持ち物の状況、学童保育での様子、支援員が訪問したときの家の中の様子などを丁寧に見ていくと、表には出ていない見えない課題がたくさん見えてきて、どのグループも活発に議論されました。

この家庭をサポートするためには、まず関係機関で情報共有をすること、母親と信頼関係を築くこと、継続的に関わること、困りごとを聞いて必要な支援につなげることが大切だという意見が出されました。上田先生からは「疑ってかかるのは悪いことのように思うけれど、疑ってかかるぐらいがちょうどよい。とにかく見つけてあげることが大事です。」との言葉がありました。

誰かに相談しても何も変わらないと思われることが一番つらいこと。だからこそ、支援側は家族の困りごとに寄り添い、手を差し伸べていく必要があるのです。



参加者の声（家庭教育関係）



01 実践発表及び事例検討会①

- ・グループでは、様々な可能な支援について出された。しっかりと家庭の状況を把握したうえでの対応が大切であると感じた。「おせつかいでも」という言葉や、「子どもにとってストレスであれば、よかれと思ってしていることもやめて見学することもある。」といったお話が心に残りました。近所のおせつかいおばちゃんが消えている時代ですが、とても大切なことだと思います。
- ・5つの事例を通して、途中検討会の時間を取りてもらい、他の市町村の方と意見交換もでき、楽しく話をさせてもらいました。上田先生のお話も分かりやすく勉強になりました。
- ・どれもこれも心の痛む事例でしたが、ご発表ありがとうございました。事例⑤の「今は見守る」という視点が大変ためになりました。「正論が子どもを困らせる」ありがちなことかもしれません。

- いろいろな事例がある中で、今、どのような支援や対策が必要であるかと見極める目を養うこと。解決に至らなくても、見守り、対策、関わっていくことの大切さを学びました。各機関との連携の大切さも感じました。
- 様々な事例を挙げてお話しいただき、とても分かりやすく勉強になりました。今後の活動に生かしていくべきだと思います。
- 5つの事例とも困難な状況でしたが、上田先生の実際に対応されたことを聞き、大変参考になりました。すぐに解決できないような事例ばかりでしたが、重要なことは、真剣にその家族のことを考え、どんな支援がベターなのかを考えることだと感じました。
- 事例をふまえての実体験を色々聞くことができたので、よかったです。町や市によつてできる事、できない事があるようで難しい事かなと思いました。
- おせつかいの線引きが難しいと感じましたが、気にかけるのは大事だと思いました。
- 実際の事例があつたので、グループで検討したあとに、実際の支援を知ることができてよかったです。見る目線によって考えられることが様々で、自分とは違う点について気づくことができた。実際に起つたときも、一人で抱えず、複数で検討していくことが必要な支援の提案につながるのだと改めて思つた。
- ヤングケアラーの見極めの難しさと対応方法、とても勉強になりました。こども達が健やかに育つていけるよう、見守り続けたいと思います。
- 安定した家庭で育つことの大切さをつくづく感じました。子育て困難な家庭への支援の種類が広がること（ヘルパー派遣等）が必要。能力のあるこどもが、その能力を発揮できる社会づくり大事であると感じる。
- 事例に関わるときに、支援員として、見極める方法等がよく理解できた。視点が分かつた。まだまだ研修を受けながら力をつけなければならないと思いました。



02 事例検討会②

- 「ヤングケアラーではなくネグレクトだ」というご意見が出たのですが、現在の4つの虐待種別の中では、ネグレクトの中にヤングケアラーが入っているということを認識しておかなければ・・・と思いました。最後に、上田さとみ先生がケースの解説や後日談をお話してくださいださつたのがとてもよかったです。
- 3人のこどものことを考えると、すぐに対応をしないと・・・と思いました。上田先生の対応に感動しました。時には見守っていくしかないこともある。しかし、上田先生は全力で家庭教育支援員や学校、保育園、行政、医療・・・と連携されていらっしゃいます。その心が、早期発見、早期対応へつながると思いました。
- 事例を聞いたときに、家庭教育支援員が夜の家庭の様子を見守ってくれていることがすばらしいと感じた。このような見守りの心が、今の社会を生きるこどもたちを救ってくれているのだろうと思う。
- 具体的にできる支援を考えることで、実際に問題にあたる時の練習になりました。
- 他の方々と意見を出し合い、何が良い判断かなど話し合えて、色々な気づきがありました。それぞれの家庭の状況を見えないところなどを想像し、よりそつた支援をしていくこと、連携する大事さなども聞けてよかったです。他のところの良い支援の仕方なども聞けて参考になりました。何人の目と心で見守っていくことが大事だと思いました。
- 前半よりもさらに困難な事例でした。こうしたこどもを救う一助になる活動を行いたいと思いました。
- やはり学校と福祉の連携が大切だと気づかされました。連携、連携と言っても、実際にするのは難しく、参考になりました。
- 少ない情報だったにもかかわらず、色々な意見を聞くことができてよかったです。
- 各自治体によっても対応が変わってくることも分かりました。
- 実話とは思えない内容に驚きましたが、皆で話し合いをして、解決策もあるのだと思いました。普通とは何かを考えさせられました。
- 疑いの目をもって人と関わり、寄り添うことを心がけていきたいと感じた。
- もう少し母はこどものことを思ってほしい。お母さんの支援も必要。
- 3人のこどもの保護が必要であるが、こども達の気持ちはどうなのかなあ？どんな母親でも、こどもにとって大好きな存在なので、分離するときのこどもへの説明の仕方はどう言えよいかと思つたりします。
- 検討会でたくさんの視点を見ること、気づくことができた。自分の考えも及ばないところが分かつてよかったです。行政、福祉、学校、地域のつながりが大切だと思いました。